

故二葉亭を懷ふ

内田 魯庵

二葉亭四迷の全集が完結して其追悼會が故人の友人に由て開かれたに就て、全集編纂者の一人として其遺編を整理した我等は今更に感慨の念に堪へない。二葉亭が一生自ら『文人に非ず』と稱したに就ては其内容の意味は種々あらうが、要するに、『文學には常に必ず多少の遊戯分子を伴ふゆゑに文學ではドウシテも死身になれない』と或る席上で故人自ら明言したのが其の有力なる理由の一つであらう。が、文學には果して常に必ず遊戯的分子を伴ふものであらう乎。凡そ文學に限らず、如何なる職業でも學術でも既に興味を以て従ふ以上はソコに必ず快樂を伴ふ。此快樂を目して遊戯的分子といふならば、發明家の苦辛にも政治家の經營にも亦必ず若干の遊戯的分子を存する筈で、國事に奔走する憂國の志士の心事も——無論少數の除外はあるが——後世の傳記家が痛烈なる文字を陳ねて形容する如き朝から晩まで眞劍勝負のマジメなものでは無いであら

う。或は又眞劍勝負であつても此の眞劍勝負が一つの快樂であつて、其中に必ず多少の遊戲的分子を含んでをるだらう。

が、二葉亭の云ふのは恐らく此意味では無いので、二葉亭は能く西歐文人の生涯、殊に露國の眞率且痛烈なる文人生涯に熟してゐたが、夫れ以上に東洋の輕浮な、空虚な、ヴオランプチュアスな、廢頹した文學を能く知り且其の氣分に襯染してゐた。一言すれば二葉亭は能く外國思想に熟してゐたが、同時に矢張幼時から染込んだ東洋思想を全く擺脱はいだつする事が出来ないで、此の相背馳した二つの思想の蹺著が常に頭腦に絶えなかつたであらう。二葉亭が遊戲分子といふは西鶴や其磧、三馬や京傳の文學ばかりを指すのでは無い、支那の屈原や司馬長卿、降つて六朝は本より唐宋以下の内容の空虚な、貧弱な、美しい文字ばかりを聯べた文學に慊らなかつた。夫故に外國文學に對しても亦、十分渠等の文學に従ふ意味を理解しつゝも猶ほ、東洋文藝に對する先入の不滿が累をなして此の同じ見方からして、其晩年に在つては曾て隨喜したツルゲーネフをも詩人の空想と輕侮し、トルストイの如きは老人の寢言だと嘲つてゐた。獨り他人を輕侮し冷笑するのみならず。此の東洋文人を一串する通弊に自づから襯染してゐた自家の文學的態度をも危ぶみ且飽足らず思ふて而して『文學には必ず遊戲的分子がある、文學ではドウシテモ死身になれない』と云ふ。近代思想を十分理解しながら近代人になり切れない二

故二葉亭を懷ふ

葉亭の葛藤は必ず愛にも在つたらう。

二葉亭に限らず、總て我々年輩のものは誰でも兒供の時から吹込まれた儒教思想が何時まで経つても頭腦の隅のドコかにこびり着いてゐて容易に抜け切れないものだ。坪内博士がイブセンにもシヨオにもストリンドベルヒにも如何なるものにも少しも影響されないうで益々自家の壘を固ふするは矢張同じ性質の思想が累をなすのである。最も近代人的態度を持する島村抱月君も亦恐らく此種の葛藤を屢々繰返されるだらう。

此の殆んど第二の天性となつた東洋的思想の傾向と近代思想の理解との衝突は啻に文學に對してのみならず總ての日常の問題に觸れて必ず生ずる。啻に文人——東洋風の——たるを屑しとしないのみならず、東洋的政治家、東洋的の實業家、東洋的の家庭の主人、東洋的の生活者たるを欲しない。一言すれば東洋的の生活の總てに不満であつて、其不満に堪へられない。そんなら其不満を破壊する決心を有するかと云ふと、決心を有さないでは無いが、常に其決心を鈍らす因襲の思想が頭腦のドコかで囁やいで制肘する。二葉亭の一生は此葛藤の歴史であつて、獨り文人たるを屑しとしなかつたばかりでなく、政治的方面にも實業的方面にも鳥渡首を突込で見て直ぐイヤになつた。此方面では二葉亭の手腕がまだ少しも認められないで政治家だとも實業家だとも誰にも云はれなかつたゆゑ、『我は政治家に非ず、實業家に非ず』と一度も言はなかつたは、二葉亭

は日本の政治家にも實業家にも嫌らなかつたのだ。朝日新聞記者として永眠して死後猶ほ朝日新聞社の好意に浴してゐるが、『新聞記者はイヤだ、』と云つた事は決して一度や二度で無かつた。唯獨り職業ばかりでは無い。其の家庭に對してすら不満が少くなかつた。(家庭が不和であつたといふ意味では無い。)更に又一步を進めて云ふと、二葉亭は生活の總てに對して不満であつたが、何よりも彼よりも此の不満を如何ともする能はざる自己に對する不満が不満中の最大不満であつたらう。言換へると二葉亭は周圍のもので一切が不満であるよりは此不満をドウスル事も出来ないのが毎日の堪へざる苦痛であつて、此苦痛を紛らす爲めの方法を求めるに常に焦つて悶えてゐた。文學も曾て其排悶手段の一つであつたが、文學では終に紛らし切れなくなつたので政治となり外交となつたのである。二葉亭が『文學では死身になれない』といふは、取りも直さず文學のやうな生柔しい事では逆も自分とての最大苦悶を紛らす事が出来ないといふ意味にも解釋される。

世の中には行詰つた生活とか生の悶えとか言ふヴオキヤビユラリーをのみ陳列して生活の苦痛を叫んでるものは多いが、其の大多數は自己一身に對しては満足して蝸殼の小天地に安息してをる。懷疑と云ひ疑惑といふも其議論は總てドグマの城壁を固めて而してドグマを以て徹底した思想とし安心し切つてをる。二葉亭が苦悶を以て一生を

故二葉亭を懷ふ

終つたに比較して渠等は大きいなる幸福者である。

明治の文人中、國木田獨歩君の生涯は面白かつた。北村透谷君の一生も亦極めて興味がある。が、二葉亭の一生は是等の二君に比べると更に一層意味のある近代的の悶えと艱みの歴史であつた。